



# 会 展 覧 介 紹

## 大原富枝生誕一〇〇周年

### 書くことは生きること展

平成24年  
9月24日(月)

11月11日(日)  
企画展示室

観覧料400円

日本芸術院会員であり、恩賜賞を受賞した大原富枝は、高知県本山町寺家(旧吉野村)の出身です。

高知女子師範学校時代に咯血し、自宅で療養生活をおくりながら執筆を重ね、初めて投稿した作品「姉のプレゼント」が「令女界」に掲載。以後「婦人文芸」「文藝首都」などに作品を発表していきます。

昭和13年「祝出征」が、この年の上半期の芥川賞候補となったのを機に上京。以後、結核と闘いながら、次々と雑誌に作品を発表しました。昭和32年「ストマイつんぼ」第七感界の「人」で第8回

女流文学者会賞を受賞。昭和35年「婉という女」が第14回毎日出版文化賞と第13回野間文芸賞を受賞しています。また、昭和45年には「於雪 土佐一條

家の崩壊」で第9回女流文学賞を受賞。平成2年には、勲三等瑞宝章受章。平成10年には日本芸術院賞恩賜賞を受賞しています。



▲野間文芸賞 賞牌／本山町立大原富枝文学館蔵

彼女の作品には「婉という女」「建礼門院右京大夫」といった歴史に題材を取った作品、「眠る女」「海を眺める女」といった自伝的な作品、「信従の海」「アブラハムの幕舎」「地上を旅する者」といった入信後に発表された作品、「彼もまた神の愛でし子か」

「女性の内徹の生涯」「草を褥に 牧野富太郎」といった評伝など多種多様ですが、多様性のみにとどまらず、これらの作品には、独自の絶対性が貫かれています。

「女性の成長する魂」を常に意識し、創作活動を続けてきた作家大原富枝。彼女の作品世界における円熟と作風の変化は、大原文学の魅力となつて、私たちを文学の世界へと誘っていきます。

今回の展覧会では、「大原富枝生誕一〇〇年」を記念し、大原富枝の生涯と歴史小説「婉という女」を中心に、各テーマごとに彼女の作品世界をご紹介します。

## 展示構成

### ■プロローグ

#### 執政「野中兼山」と大原富枝「婉という女」

※野中兼山・人と業績と野中婉

『婉という女』の舞台になった宿毛や高知市内や野中兼山の所領地であった県内各所を、ご紹介いたします。また、野中兼山という人物、そのお仕置き(政治)と失脚。兼山の没後、家族に与えられた幽囚とは…。野中一族、特に野中婉の生涯に迫ります。

### ■一、人間・大原富枝

大原富枝の87年の生涯をご紹介します。

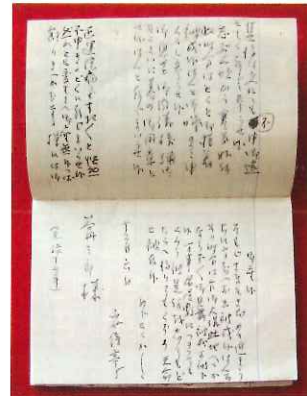
女性としての幸せを求めながらも諦めなければならなかった青春時代。当時不治の病と恐れられていた結核の再発と闘いながらも、作家として数々の作品を残した大原の生涯をふり返ります。

### ■二、大原富枝その作品の魅力

ここでは、大原富枝の作品を歴史、自伝、信仰、評伝とテーマごとに紹介します。

#### 第一部 歴史小説

代表作として知られる歴史小説「婉という女」、兼山の妻市を描いた「正妻」、婉の姉将と妹寛を描いた「日陰の姉妹」など、野中一族の女性たちそれぞれが生きた場所を見つけ出し、懸命に生きようとする姿を描いた作品群をご紹介します。また、『於雪 土佐一條家の崩壊』や『建礼門院右京大夫』といった力作も紹介します。



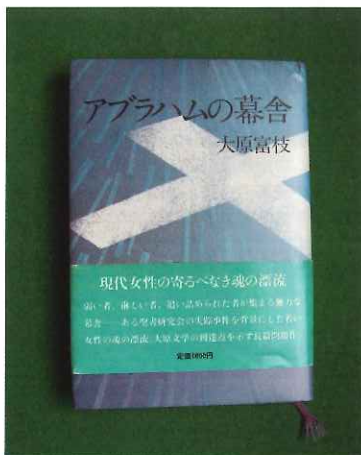
▲野中婉が谷桑山に宛てた手紙を書き写したノート(大原直筆)／本山町立大原富枝文学館蔵

### 第二部 自伝的小説

作品には「眠る女」「海を眺める女」などが挙げられます。これらの作品は大原の心の叫びが発露された作品であり、大原文学を紐解くにあたり、重要な役割を果たしています。

### 第三部 信仰と作品

大原は、64歳の時に洗礼を受けています。入信後は、時代に翻弄されながらも、信念を曲げずに行動する女性の心理を描いた、より深みのある作品が残されており、ここでは「アブラハムの幕舎」「信従の海」「地上を旅する者」「ハガルの荒野」などを中心にご紹介します。これらの作品には、アウトサイダーと言われる女性たちの姿が静かなる筆致の中にも鮮烈に描かれており、大原作品の幅の広さと奥行きが感じられます。



▲『アブラハムの幕舎』／昭和56年 講談社刊



# 展覧会 紹介

## 大原富枝生誕一〇〇周年 『書くことは生きること』展

平成24年  
9月24日(月)

11月11日(日)  
企画展示室

観覧料400円

### ☆展示解説

展覧会担当者による  
展示解説を行います。

### 毎週土曜日

各日とも午後1時半～  
(約30分)  
参加には**当日観覧券**  
が必要です。  
直接会場にお越しください。

### 第四部 評伝

『今日ある命―小説・歌人三ヶ島霞子の生涯』  
『彼もまた神の愛でし子か―洲之内徹の生涯』  
『草を褥に 牧野富太郎』など大原の晩年に書かれた作品の数々をご紹介します。



▲日本芸術院にて恩賜賞受賞後の  
大原富枝(本山町立大原富枝文学館蔵)

### 三、大原富枝作家からのメッセージ

中村稔、高橋英夫、富岡幸一郎、瀬戸内寂聴、  
宮尾登美子他(予定)といった、大原文学に理解  
を示す作家の方々に、大原文学の魅力を語って  
いただきます。

### 四、大原富枝と高知

田岡典夫が編集出版した『南風』には、大原  
富枝の他にも小山いと子、田宮虎彦、上林暁と  
いった高知ゆかりの作家が執筆しています。

ここでは、『南風』に掲載された高知ゆかり  
の作家の作品紹介や、作家からの書簡など  
を通して大原と高知とのかかわりをご紹介  
します。

大原富枝が主に活躍したのは、第二次  
世界大戦後です。この展覧会では、日本の  
戦後の女性文学史に名を刻んだ大原文学  
を当時の社会情勢や日本人の意識変化を  
視野に入れながら見ていきたいと思います。  
す。男性中心主義的な日本の近代以降の  
社会や文学界において、女性の社会進出、  
文学への台頭は目をみはるものがありま  
した。結核を患いながら戦前、戦中、戦後  
と文学一筋に生きた彼女の人生をその時  
代背景と共に紹介します。

※主な出展資料

「婉という女」「正妻」「日陰の姉妹」  
原稿、秋砧挿絵、大原富枝直筆書軸、  
サイン色紙、大原富枝愛用の着物、毎  
日出版文化賞・野間文芸賞・女流文学  
賞などの賞状、恩賜賞勳章、婉の手鏡、  
谷秦山の書簡軸など約150点

(学芸課長/津田加須子)

## ◆関連企画のご案内◆

### ■記念講演会 「大原富枝の歴史小説」(仮)

日 時：平成24年10月7日(日) 午後1時～午後2時30分  
講 師：中村稔氏(日本近代文学館名誉館長、日本芸術院会員、詩人、弁護士)  
場 所：高知県立文学館1Fホール 定 員：100名  
参 加：要**当日観覧券** 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

### ■輪読「婉という女」を読む

山形県、徳島県、愛媛県、香川県の朗読のメンバー及び高知県立文学館朗読カルチャーサポーターが「婉という女」  
を輪読します。  
日 時：平成24年10月6日(土) 午後1時～午後4時  
場 所：高知県立文学館1Fホール 定 員：100名  
参 加：無料 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

### ■文学散歩「大原富枝文学館と大原富枝ゆかりの地を訪ねる」

お婉堂、帰全山公園(野中兼山銅像、秋田夫人の墓、兼山のあほ堀等)～大原富枝生誕地～大原富枝墓地～  
大原富枝文学館～四季菜館で吉野川を眺めながらのリッチな昼食、さくら市でお買い物等をお楽しみいただきます。  
日 時：平成24年10月18日(木)  
集 合：高知県立文学館1階ホール 参加費：3500円(バス代、昼食、観覧料、保険料込み)  
申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員30名)

### ■朗読の会「大原富枝作品より～」 文学館朗読カルチャーサポーターによる朗読。

日 時：平成24年10月20日(土) 午後2時～ 場 所：高知県立文学館1Fホール  
参 加：無料 申 込：当日、直接会場にお越しください。

### ■映画上映会「婉という女」

日 時：平成24年10月21日(日) 午後2時30分～午後4時30分  
集 合：高知県立文学館1階ホール 参加費：要**当日観覧券**  
申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員50名)

# なばたとしたか絵本原画展

「ナバーランドへようこそ」

高知県立文学館では7月28日(土)・9月17日(月)祝まで、絵本『こびとつかん』『いーとんの大冒険』でおなじみのなばたとしたかさんの貴重な原画やラフスケッチが一堂に展覧できる「なばたとしたか絵本原画展」ナバーランドへようこそ」を開催し、会場は連日多くのお客様でにぎわいました。展覧会にあわせて開催した関連企画の一部となばたさんを迎えて8月19日(日)に開催したサイン会の様子を紹介します。

## ●高知こびと探し隊(KKS)結成!

絵本『こびとつかん』は「こびとを通して、命の大切さや、見慣れた身近な自然のなかに目をごらすと様々な不思議がある」ということを教えてくれる作品です。

当館の周辺にはどんな自然があり、どんなこびとが生息しているのか、「高知こびと探し隊略してKKS」を結成して7月28日(土)・8月5日(日)・15日(水)・29日(水)・9月17日(月)祝にフィールドワークを行いました。

※8月15日(水)・29日(水)は追加開催

KKS隊員として参加した親子約50名は隣接する県立図書館やひろめ市場のスタッフからこびとの目撃証言を聞き、藤並の森などでこびとの痕跡を探し、「高知こびとMAP」を

作成。木の根本の小さな茸や高知城の堀に泳ぐ亀も見逃さずメモして、あらゆる場所でのこびとの気配を探ります。

こびとを通して地域の再発見にもつながる、有意義なイベントとなりました。



どんなこびとに  
出会えたかな?

▲「高知こびとMAP」を書く隊員たち。

## ●ポップアップカード作りも大好評!

毎回好評をいただく文学館の工作イベント。今年は「カクレモジリが飛び出すカード」と、「いーとんが空を飛ぶカード」を職員が考案しました。作者のなばたさんからも「面白い!」と太鼓判をいただき、参加されたお客様からも大好評で、展覧会の楽しい思い出作りになったとの声を多くいただきました。

## ●大盛況のサイン会! おかげさまで新記録達成!

▶皆さん上手に作っていました。



8月19日(日)にはなばたさんを招いて事前抽選の100名を対象にしたサイン会を開催しました。4時間に及ぶサイン会でしたが、お客様ひとりひとりに優しく語りかけながら希望のイラストを丁寧に描くなばたさんの姿に子どもたちは大興奮。終始笑顔あふれるサイン会となりました。

この日は、スタンプリイイベントも同時開催しており、開館以来初めての記録となる、1日で1768人のお客様にお越しいただきました。



▲優しく、気さくだったなばたさん。

展覧会は大好評のうちに終了しました。開催に尽力いただいたなばたさん・関係者の皆様、本当にありがとうございました。(学芸課/福富陽子)



© Toshitaka Nabata

## 企画展

# 川と文学を終えて

高知県の川をテーマにした企画展「川と文学」(6月9日〜7月16日)は、川にまつわる作品の紹介や作家の愛用品などの展示に加え、民話の紹介やプラネタリウム・川釣りなどの体験コーナーなど、さまざまな角度から高知県の川を楽しむことが出来ると、多くの方々から好評をいただきました。

特に、県内の同人作家による川の作品コーナーでは、同人雑誌の魅力を再確認したという方も多く、別のテーマでも同じような企画をやって欲しいという要望が多く寄せられました。

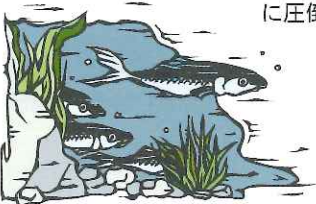
関連企画では、仁淀川と四万十川を舞台とした児童文学作品『ガンバとカワウソの冒険』の著者である斎藤惇夫さんによる講演「川と私の物語」や、桂浜水族館や屋形船による浦戸湾クルーズを楽しむ文学散歩「川から海へ」、市原麟一郎さんによる七夕紙芝居などを開催しました。

高知県は日本の川の原風景が残された数少ない場所でもあります。今後も、文学を通して、高知県の川の素晴らしさが全国に発信されればと願っています。

(学芸課/永橋禎子)



▲斎藤惇夫さんの講演「川と私の物語」の様子。斎藤さんの物語に対する情熱に圧倒されました。



猪野睦

朝は六時にサイレンが四囲に併立する山々にこだましつづける。営林署のガソリントロリは絶壁の間をくぐりぬけて、国営林のある別府への唯一の交通を始める。トロロの上にワクをはめた箱の中には毎朝、二、三十人の無賃乗客がうれしげに呼び合ふ。

◀ 岡ノ内葛橋（『物部村史』より抜粋）



大板については明治42年に博文館からでた田山花袋編の『新選名勝地誌』南海道の部にもでてくる。このなかに物部川があり大板橋は明治15年、木橋になるまで蔓橋であり、そこを渡って物部川峡谷中の中心都市邑大板に達するとあった。そして「山中有名なる蔓橋三所あり」として

橋はシラクチカヅラを採つて2大線を造り、兩岸大木を繋ぎ、長さ河幅と等しき桧2本を横架し、無數の小蔓線を編織し板子を敷いた。長さ15間、水面より橋桁まで5丈、つまり長さ30メートル、高さ15メートルのゆるる蔓橋だった。

地元民は荷物薪木を背負い放歌自若として行く又一興なり。余亦勇を鼓して之を渡り対岸に小憩し橋図を模写す。橋下の河水を浴す。樹木蒼生し日光水面に透さず冷気骨に徹すとある。どんな民謡を歌つてゆれる橋を渡つていたろうか。押谷も岡内も対岸へは今、大きな橋があり、むろん森林鉄道の跡もない。

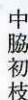
先日そんなかつての秘境を思いうかべながら  
 県境の別府まで走った。『物部村史』には岡内蔓  
 橋の古いスケッチが残っていた。(詩人)

(詩人)

— 寄贈資料から —

「きみはいい子」

中協初枝著 2012年5月  
ポプラ社刊 中協初枝氏寄贈



中脇初枝さんは、徳島県生まれ、高知県育ちの作家。1991年、高知県立中村高等学校在学中に、小説『魚のように』で第2回坊っちゃん文学賞を受賞してデビュー。

高校卒業後、筑波大学に進み、民俗学を専攻。在学当時のフィールドワークの体験は、後に小説『祈祷師の娘』を生みました。また、2006年には一年にわたり、毎週日曜日の高知新聞に、幡多の昔話再話「ちゃあちゃんのむかしばなし」を連載されています。

中脇さんは、2004年に『祈祷師の娘』を出版後しばらく小説から離れ、『こりやまてまて』『あかいくま』など、絵本や童話を中心に発表されてきました。

今回ご寄贈いただいた『きみはいい子』は久々の小説作品で、五篇からなる連作短篇集。テーマ

▼中脇初枝「きみはいいい子 中脇初枝著 ポプラ社刊」▼小松美沙子・雑誌「鐵塔」C D版(全13冊 全文収録)他▼土佐山内家宝物資料館「(D V D) 土佐をひもとく 土佐山内家宝物資料館企画制作」他▼新宿区「漱石山房」の復元に関する基礎調査報告書 新宿区・丹青社編 新宿区刊」▼土居修「教科書女子新國文巻2 芳賀矢一編 富山房刊」他▼沢英彦「詩集 時の器 沢英彦著 形象舎刊」▼須藤泚一郎「試みの自画像 詩作家 星野富弘の世界 富弘美術館編刊」他▼星野明彦「星野明彦詩集「いのちのにつぎ」 星野明彦著 コールサック社刊」▼横田晴光「ジョン・マン・ドレー 山本一力著 講談社刊」他▼早稲田大学教育総合研究所「震災と教育」学び、将来へ伝えるー早稲田大学教育総合研究所監 学文社刊」▼上田茂敏「蕉堅葉 西山招慶禪院藏版 絶海中津著」他▼ひまわりの会「ひまわり(雲母会員エッセイ集) 8集 ひまわりの会編刊」▼金子晋「永田耕衣俳句世界 金子晋著 田工房刊」他▼堀切直人「寺田寅彦語録 堀切直人著 論創社刊」▼神原忠彦「遺歌集 爽風のかたみ 神原美知世(爽風)著 神原忠彦編 共和印刷刊」▼竹本義明「江戸小唄集 千種」▼徳弘孝夫「日本短篇文学全集 第41巻 高見順 田宮虎彦 安岡章太郎 筑摩書房刊」他

は児童を待。夕方五時までは家に帰らせてもらえない小学四年生の男の子。まだ自分で靴を履くこともできない幼い娘に手を上げてしまふ母親。全篇、ある雨の日の同じ町を舞台に、それぞれの事情を抱えた家庭の深刻な状況が描かれます。

しか、本書は絶望的な物語ではありません。人と人が緩やかにつながって、かすかに希望の光が射すこの作品は、発売前から多くの書店員の心を動かし、書店の垣根を越えて、本書を応援するフリーペーパーが作成されるに至りました。フリーペーパーには、全国各地の書店員から寄せられた感想が並び、「一人でも多くの人に届けたい」との思いが伝わってきます。刊行後、新聞やテレビ等のマスメディアも続々と本書を紹介。「きみはいい子」はたくさんさんの声援に後押しされ、増刷を重ねています。

（学芸課／小松路代）

(学芸課／小松路代)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

# 榎村浩 生誕一〇〇年 を顕彰

今年、6月1日に生誕100年を迎えた高知市出身で詩人の榎村浩。(1912〜1938)

本名は、吉田豊道。幼時より神童として知られていました。

19歳で詩作を始めると同時にプロレタリア作家活動同盟高知支部の結成に参加し中心メンバーとして活躍。文学活動とともに日本共産青年同盟にも加盟し、非合法反戦活動を行いながら「生ける銃架」「間島バルチザンの歌」などのすぐれた反戦詩を次々と発表しました。しかし、残念ながら、獄中病を得、26歳という若さでこの世を去っています。

彼の政治性と熱情に支えられた格調の高いこれらの詩は、日本プロレタリア詩の記念碑的作品として今日でも高く評価されています。



▲関西中学校(岡山)時代の榎村浩

榎村の没後、雑誌『文化評論』に「榎村浩没後25周年記念特集」が掲載、『間島バルチザンの歌―榎村浩詩集』が出されました。

また、土佐文雄の小説『人間の骨』、大原富枝の小説『ひとつの青春』などにより、広く存在が知られるようになりました。

高知市横浜や桜馬場の城西公園には、詩碑が建立され、1978年には、木之下晃明監督により『人間の骨―榎村浩物語』として映画化もされています。

今年、生誕100年を迎えた榎村浩。意志を貫き、優れた作品を残し、激動の時代を駆け抜けた彼の文学を常設展示室にコーナーを設けて顕彰します。

※なお今回の展示は平成24年度の博物館実習生が企画・構成してくれました。

(学芸課長/津田加須子)



▲高知市城西公園西側にある榎村浩の詩碑  
「間島バルチザンの歌」の冒頭

## 常設展企画コーナー

# 「田岡嶺雲 没後一〇〇年展」 のコーナーが、変わります！

■9月1日(土)から

11月30日(金)まで

(以降、一部資料が入れ替わります)

高知県立文学館では、田岡嶺雲が没した9月7日にあわせて、現在の「田岡嶺雲 没後100年展」コーナーを一部リニューアルしました。

夏までの期間は、当館所蔵資料を中心に、田岡嶺雲の足跡をたどりながらご紹介しましたが、今回は現在展示中の資料と新たに寄贈された新資料を一部入れ替えて展示しました。

今回の新資料は、田岡嶺雲研究の第一人者である西田勝氏より寄贈いただいたもので、嶺雲の評論集『うろこ雲』に関わる嶺雲の肉筆原稿が中心となっています。明治時代は言論統制が厳しくなっていた時代で、嶺雲の評論集や雑誌は、鋭い社会批評のため政府によりことごとく発禁処分を受けました。彼は発禁の難を逃れるために推敲を重ねました。今回の資料では、それらの苦心のあとが見られる肉筆原稿のほか、作品集に掲載するため新聞切り抜きに朱を入れたものなどもご紹介します。

また、嶺雲のコーナーについては、年内に再び新たな資料の入れ替えを予定しております。嶺雲のふるさと・高知で初公開となる資料を、ぜひこの機会にご覧ください。

(学芸課/野々村昭美)

## 西田勝氏記念講演会開催！

12月22日(土) 午後2時〜3時30分

「ポスト坂本龍馬としての田岡嶺雲」

場所：文学館1階ホール

参加費：無料

お問い合わせ・お申し込みは文学館まで。



▲田岡嶺雲草稿「国家主義と個人主義との衝突」

# 文学館マスコット キャラクタ―の一般投票、 もうすぐ終了です！

高知県立文学館では、高知の文学に親しみを持っていていただけるよう、マスコットキャラクタ―を作ることとし、一般公募いたしました。募集は6月18日に締め切りました。がなんと全国各地から313点もの応募がありました！応募してくださった皆さん、本当にありがとうございました。これらの応募作品を審査員によって4点に絞り込み、文学館に来館された皆さんの一般投票によってこの4点の中から最終的に文学館のマスコットキャラクタ―となる1点が選ばれます。

現在、文学館1階ロビーに設置した投票所で、投票が行われています。一般投票は9月17日(月・祝)までとなります。(1人1票までとなっています。)

各キャラとも接戦を繰り広げています。マスコットキャラクタ―の発表は10月初旬を予定しています。

(学芸課／永橋禎子)



この4点の中から、高知県立文学館のマスコットキャラクタ―が選ばれます！

## 館長室から

いま、『万葉集』に思う

元吉 喜志男

文学館に来てまた日が浅い頃、この欄で「人の一生は精々100年であるのに比べ、人がつくった芸術の命の長さは何と豊かであり、文学の世界を見ても、紫式部の『源氏物語』は1000年もまだ生き続けている」という寂聴さんの芸術観が、新米の素人館長の座右の銘になっているとの思いを書かせて戴いたことがあります。

わが国の文学で1000年を超えるという言葉で思い浮かぶものの一つに『万葉集』があります。当館では今年度の文学専門講座にその『万葉集』を取り上げました。講師は本県出身の高岡市万葉歴史館館長で奈良女子大学名誉教授の坂本信幸先生です。1200年以上も前に成立したと推定される、20巻、4500首に及ぶ歌からなるわが国最古の歌集。様々な身分や職業の人たちが作者となり、心の深いところから湧き上がってくる純粋な感情を歌に託した内容からは、時間・空間を超えて人間にとって大切な、ほとぼしするような命の輝きのような感動を覚えます。題材も実に千差万別であり、自然の美しさへの讃美、家族や夫婦愛、燃えるような恋愛歌、切々たる哀悼歌、思わず笑ってしまう滑稽歌等々、素朴で率直な気持ちの発露が読みとれます。万葉人が観ていた四季折々の風景や風情を愛でる心を慕ったり案じたりする細やかな心情などは、幾星霜を越えた今でも、現代を生きる我々の心に新鮮に伝わってきます。

科学技術が進化し経済や物質文明の恩恵を享受出来る環境にある我々現代人。それでも短い言葉の響きの中に覚える瑞々しさは、改めて「人間にとっての豊かさとは：？」を考える上で貴重な煌めきを発し続けているように思えます。

## 朗読コンクールについて

高知県立文学館では、8月に「第15回児童生徒文学作品朗読コンクール」地区審査(予選)を県内の3会場で実施しました。朗読を通して文学に親しむ子どもを育てようと毎年行っており、8月16日(黒潮町)、20日(田野町)、23日(高知市)と県内3会場で開催され、120名の児童生徒の皆さんが、熱心な練習の成果を披露して下さいました。地区審査を通過した皆さんは、11月11日(日)に文学館で開催される県審査に出場します。

11月の県審査の日にあわせて、高知県出身の絵本作家・田島征三氏による記念講演会を予定しています。田島氏は多摩美術大学在学中に制作した手刷り絵本『しばてん』をはじめ多くの絵本を出版、また、高知で過ごした少年時代を書き綴ったエッセイ『絵の中のほくの村』は映画化され、高い人気があります。貴重な講演が聴けるこの機会に、ぜひ文学館にお越しください。コンクール・講演会ともに一般公開し、いずれも入場は無料です。

(学芸課／北添尚子)



▲審査員の講評を熱心に聴く児童生徒の皆さん(高知会場)



## 企画展 案内

### 大原富枝生誕100周年 ～書くことは生きること～展

生誕100年を記念し、大原富枝の生涯や歴史小説『婉という女』を中心に、各テーマごとに彼女の作品世界をご紹介します。

9月24日(月)～11月11日(日) **会期中無休**

会場：高知県立文学館2F 企画展示室

観覧料：400円(常設展含) 開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

展覧会の紹介をしています！詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



(※高知県本山町との共催事業です。)

## 冬～春 の 企画展

### 大正ロマンの画家 高島華宵の世界

11月24日(土)～平成25年1月27日(日) 場所：企画展示室 観覧料：400円(常設展含)

大正から昭和初期にかけて一世を風靡した挿絵画家・高島華宵の作品を紹介する展覧会。「華宵好み」とよばれる独特の美人画は今も多くファンを魅了し続けています。大正10年の今年、高島華宵の華麗なる世界をお届けします。

(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります。)



「青葉かげ」© 弥生美術館



### 文学 Media Art 展 紀貫之からライトノベルまで

平成25年2月9日(土)～4月7日(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円(常設展含)

文学とメディアアートという異なる分野の芸術のコラボレーションによって、より深く芸術世界を楽しもうという試みです。手ざわりや映像、音など、感覚を駆使した文学の新たな楽しみ方を体感してみませんか。

※この展示は、平成19年12月15日～平成20年2月17日にかけて東京都写真美術館にて開催された企画展「文学の触覚」を下載きとして再構成したオリジナル企画です。

## 朗読フェスティバル 2013 出演者募集中！

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しんでいただこうと、平成25年2月16日(土)に「朗読フェスティバル2013」を開催いたします。朗読者として出演してみませんか？

●出演申込のしめきり●

11月30日(金)

募集要項に必要事項をご記入の上、文学館まで応募してください。

※出演には、今年度から参加料(500円)が必要となります。

〈出場された方には、素敵な記念品をプレゼントします〉

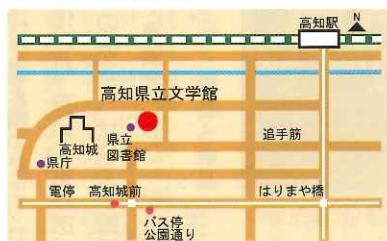
朗読することー  
それは、目で、耳で、声で  
文学を楽しむということ。

#### 利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)  
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。  
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。  
観覧料 一般350円 企画展はそれぞれ異なります。  
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、  
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、  
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者  
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。  
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。  
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶながく室、  
茶室「慶雲庵」  
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp  
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

#### 交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(朝倉(高知大学前)行または県庁前行)「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850  
高知市丸ノ内1丁目1-20  
電話 088-822-0231  
FAX 088-871-7857